

「作庭家・庭園史家 重森三玲展」

平成21年4月1日から5月31日まで、当館において特別企画「作庭家・庭園史家 重森三玲展」を開催した。重森三玲は、モダンな意匠と力強い石組で知られる枯山水庭園が有名な作庭家であり、庭園史研究の礎を築いた庭園史家でもある。近年では、平成18年から19年にかけて、東京、京都、静岡で大規模な展覧会が開催されるなど、三玲に関する認知度は年々高まりをみせている。岡山では、郷里の吉備中央町で重森三玲記念館が開館（平成11年）し、三玲が京都に作庭した「友琳の庭」を移築（平成14年）するなどの活動を通して、顕彰が行われてきたものの、県内における認知度や注目度はかならずしも高くなかった。

平成20年2月、それまで京都工芸繊維大学において保管されていた三玲の遺品や資料類が岡山県立美術館に移管されることとなった。実際に借用作業に立ち会ったのだが、庭園の設計および実測図面だけでも1000点を超え、蔵書や原稿、三玲自身が撮影した庭園写真のガラス乾板などもあわせると数千点にも及ぶもので、その膨大な量に圧倒された。それらの資料を活用するかたちで、本展覧会の開催が実現したわけである。

今回の展覧会では、そのタイトルが示すとおり、三玲の「作庭家」「庭園史家」としての業績に焦点をあてたものであった。展示内容は、どうしても図面や写真が多くなるが（そのほか、遺愛の品や三玲の手による書画なども展示したが）、その実物不在の物足りなさを払拭したのが、展示室に復元・公開した書院である。この書院は、吉備中央町に遺されていたもので、三玲がそこに暮らしていた実妹のためにデザインしたものであった。とくに、銀と藍の市松模様に雲紋がたなびく構図の襖は、伝統的な2つの意匠を組み合わせながらも、三玲が好んで口にした「永遠のモダン」を体現しており、多くの来館者たちの目を引いた。この書院の復元にあたっては、岡山県総社市在住の文化功労者・書家の高木聖鶴氏からの寄附により実現したことをご紹介させていただく。

また、2ヶ月間という長い会期であったため、お客様のリピート率を高めることと、マスコミに継続的に話題を取り上げてもらうことを期待して、会期中はさまざまな関連行事を開催した。なかでも、小中生を対象に実施したワークショップ「ミニチュア枯山水をつくろう」では、三玲のもとで修行した経験をもつ、造園家・岩本俊男氏の協力で、本格的な材料（三玲も愛用した愛媛県の青石など）を使用したミニチュア枯山水作りをすることができた。子供たちに伝統的な日本庭園について、その一端にでも触れてくれればという意図で企画したのだが、子どもたちの作る枯山水の石組は、どれも独創的でユニークなもので、講師を務めた岩本氏も「子どもたちの自由な発想にはかなわない。勉強になる」と感心することしきりであった。

三玲の業績は、庭だけでなく、いけばなや茶道、建築といった日本文化全般にわたるものであり、また、勅使河原着風との前衛いけばな運動を通して、中川幸夫ら若いアーティストたちとの交流やバリのユネスコ庭園を造ったイサム・ノグチを指導するなど、さまざまな分野での活躍が知られている。今後、そのような多方面に広がる活動についても研究が進展し成果が発表されるであろう。当館でも寄託資料からの調査を進めてゆきたい。

また今後の課題として、資料類の分類や保存についても考えてゆく必要がある。資料の大半を占める図面およびガラス乾板は、研究対象として重要な資料であるが、年月が経つごとに劣化してゆく。これらを整理し目録を作り、データベース化を行うことが今後の三玲研究への一歩として本館の重要な任務と考えている。

【学芸員 齋藤武郎】



2階展示室に復元展示された書院



三玲が実測した県内11ヵ所13枚の図面も展示



熱心に石組を考えるワークショップ参加者

Shigemori Mirei

展覧会データ

■観覧者数 14,725人
■会期中の行事
記念講演 4月1日(水)14時～ 「美の道者 重森三玲の生涯」 講師:重森執氏氏(重森 GEITE 事務所主宰) 参加者:92名
フロアレクチャー 4月12日(日)①10時～②14時～ 「重森三玲 友琳の庭復元―復元へのこだわり―」 講師:岩本俊男氏(造園家) 参加者:各回およそ50名
ワークショップ 4月25日(土)13時～ 「ミニチュア枯山水を作ろう」 講師:岩本俊男氏(造園家) 参加者:16名
美術館講座 5月2日(土)14時～ 「作庭家・庭園史家 重森三玲」 講師:齋藤武郎(学芸員) 参加者:58名
美術の夕べ 5月22日(金)18時～ 「作庭家・庭園史家 重森三玲展をみる」 講師:齋藤武郎(学芸員) 参加者:15名

- (1)「五姓田―明治新潟の人々を描いた絵師」
新潟市歴史博物館 4月25日―6月7日
- (2)「集めることはアートになる!」
鶴岡アートフォーラム 4月25日―5月25日
- (3)「現代の水墨画 2009 水墨表現の現在地点」
富山県水墨美術館 1月30日―3月22日
練馬区立美術館 4月21日―5月31日



新潟市歴史博物館「五姓田」展図録



「集めることはアートになる!」展チラシ



「現代の水墨画 2009」展図録

よそちの展覧会

(1) 昨年当館で開催した「五姓田のすべて」展で見たように、五姓田派には岡山出身の作家が多く関わっていたのだが、この五姓田派は、初代芳柳が一時期新潟を拠点に肖像画を制作し、また二世芳柳が同地の師範学校に図画教師として赴任するなど、新潟とも深いつながりがあった。本展覧会はこの五姓田派と新潟との関係に焦点を当てた展覧会である。

大変興味深かったのは、我々の展覧会で紹介しきれいでなかった、これまであまり知られていない五姓田派関連の作品や資料が、数多く出陣されていたことである。初代芳柳が描いた新潟の人々の肖像画は、より充実したラインナップによって紹介され、当館での展覧会では広報用ポスター・ちらしの画像に使用した《新潟萬代橋図》については、これを描くに当たって参考にしたと考えられる写真も併陳されていた。また二世芳柳による風景画の秀作や、幽香による絹本の肖像画など、なかなかこれまで目にできなかった作品が並んでおり、たいへん見応えがあった。

(2) 「集めることはアートになる」と題されたこの展覧会は、鶴岡アートフォーラムで開催された。この展覧会に招かれていたのが、津山市在住の現代美術家・太田二郎氏である。岡山県内では大原美術館や奈義町現代美術館での個展が記憶に新しいが、最近はその故郷である山形県の各地でも、その作品が頻繁に紹介されている。

通例の現代美術家の個展と異なっていたのは、この展覧会が「市民交流プログラム」として位置づけられていた点である。展示されている作品を見るだけでなく、インスタレーションに用いる作品の素材を観客が制作できるコーナーが設置されているなど、来館者の参加を誘う仕掛けが随所に見られた。

さらに、太田の制作活動が、日常のなかにある様々な物を収集することによって成り立っている点に着目して、「市民アーティスト」と名付けられた12組の参加者が、それぞれ身の回りのものを持ち寄って美術作品を制作し、その成果を会場に展示するなど、意欲的な企画も行われていた。会場に置かれたVTRでは、主催者の鶴岡アートフォーラムからの質問に答える形で、作家が自らの歩みとその作品について、興味深く語っていた。近いうちに展覧会の記録集が刊行されるとのことである。

(3) 筆者がこの展覧会を見学した練馬区立美術館は、これまで幾度か現代の日本画を取り上げ、何かと便利な表現ではあるものの、実際のところは曖昧で複雑な様相をもつ「日本画」の内実を、真摯に問う展覧会企画を行ってきた経緯がある。今回の展覧会では、その枠組みを、客観的には定義しづらい「日本画」ではなく、画材としての墨に着目して、「水墨画」の現代における表現を探る展覧会として構成していたが、このことが結果として、展覧会に非常に明解な印象を与えることになったと思う。

出品作家は、日本在住の11人の作家（うち1人が中国人、残る10人が日本人）。このラインナップが、企画者の見識の深さを物語っている。いわゆる現代美術の世界で注目されている若手の人もいれば、日本画家として知られる人、あるいは水墨画の公募展などに作品を出品している、まだまだ名前知られていない人がある。通例は別々の場所や文脈で紹介されていたこれらの作品は、「墨」をキーワードの一つの会場で紹介されることによって、それぞれが個性を主張しつつ、全体としては墨がもたらす表現の大きな可能性を、我々に示していたのではないかと思う。会場のなかには、終始ある種の緊張感がみなぎっており、ひとつのテーマに即した秀作を、様々な発見とともに堪能することができた展覧会であった。

【学芸員 廣瀬久久】

全国美術館の二組織

全国美術館会議の第58回総会に出席した。この組織は美術館長の友情を深めながら、美術館運営について語り合う場として始まった。10数年前、300館を

こえる日本の国公私立美術館の唯一の組織に成長し、美術館が抱える諸問題を議論する場となり、国際化された世界のなかで日本の美術館を代表する組織と認められた。今回の会議では、かねてからの懸案である「美術品の国家補償制度」について文化庁をまきこみ検討された。諸外国から借用し展覧会を開催する美術館にとり、借用作品の万一の損傷などを国家が補償する制度である。先進諸国のなかで制度がないのは日本だけ。かくのごとく全国美術館会議が美術館をとりまく諸問題を議論しあえるのは、心強い。

直に人々に接する現場にある私たち個々の美術館は、文化立国として国際的な信用と信頼の中で活動しているのであると実感する。

もうひとつは、全国の公立美術館が組織する美術館連絡協議会で、今年は創立25周年を迎えた。公立という立場にある美術館が、ゆるやかな連帯で展覧会を活性化させるのが目的で組織され、現在は120館が加盟している。一私企業である読売新聞社が事務局となり支援する展覧会開催の枠を近年はこえている。教育普及活動の助成、展覧会カタログ論文賞（本館では、昨年度に廣瀬就久学芸員の「東島毅の絵画」がカタログ論文賞を、本年は「朝鮮王朝の絵画と日本」が特別賞を受賞している）や学芸員海外派遣・研修セミナーなど、実際の活用の場に広がっている。

25周年の記念として全国100の公立美術館コレクションから出品された「日本の美術館名品展」（～7月5日、東京都美術館）は、西洋と日本の近代美術（絵画・彫刻・版画）に限定したコレクションを一堂に会した展覧会である。美術館の生命ともいえるべきコレクションを、日本の公立美術館はいかに行ってきたかを披露する機会であり、豊かで優れた美術作品が公立の美術館に所蔵されていることは、実に心強い。

美術館の美術作品は、鑑賞し感動・共感される人々とともに存在するのだと、改めて思う。

【館長 鍵岡正謹】

近ごろの美術館

当館では、昨年12月～今年の3月にかけて行ったりリニューアル工事の中で、サイン（案内表示）の刷新を行いました。

もともと建物の構造が複雑なため迷う方が多く、既存のサインに加え、職員が手作りのサインを設置していましたが、見やすさに難があったり、その場しのぎの対応になってしまったり、という状況がありました。そこで改修を機に、いったん状況を整理し、改めて分かりやすさ、見やすさに配慮した、統一されたサインが必要だと考え、実施する事になりました。

今回は、実際に計画を進める中で、「分かりやすさ」に関して工夫（苦勞？）した点を少しご紹介します。

スタートに際して、まずは現状の整理を行いました。館内の全ての場所の写真を撮り、人の流れを観察し、サインの数を数えてまとめ、そこに、今までに利用者の方から出た意見を加え、迷いやすい部分をピックアップし、必要なサインを割り出してきました。

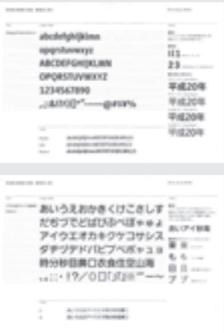
次に、重要な要素である基本の色・書体については、白色の地にグレーの文字の組み合わせとしました。既存のサインよりもコントラストを高めて見やすくし、さらに文字にはUDゴシック※を採用しました。景観に配慮しながら、読みやすさを確保しています。

色・書体・内容が決まり、実際の制作に至った段階でも、たとえば1Fに設置したフロア図では、ガラスへのシルクスクリーン印刷と、カットニングシートを組み合わせ文字を浮か上がらせるなど、細かい工夫をしています。

以上の手順で、新しくエレベータ、トイレ周り、エントランス周りに設置したサインは約20ヵ所になりました。開館して2ヶ月、さいわい何事もなくご利用頂いているようで、まずは安心しています。

振り返れば、計画を進める中で「誰にでも分かりやすい」という事の難しさを常に感じていましたが、この度の刷新が、また今後、実際にご利用頂いた方の意見を重ね「誰にでも」の幅を広げていくための土台となれば、と思います。

【学芸員 子川さつき】



デザイナーから提示された文字選定のための資料

※フォントメーカーのイワタとパナソニックが、UD（ユニバーサルデザイン）の視点に基づいて共同開発した書体。

鍵岡館長の

美術体験の記

岸田劉生

岸田劉生（1891～1929）の油彩画を3点所蔵している。「早春の畑」（大

正3年）「冬瓜葡萄園」（昭和2年）と本作品である。劉生は、津山藩出身の「明治の先覚者」岸田吟香（1833～1905）の四男で、岡山と縁のある画家である。本作品の画面右下に「昭和四年正月劉生写 Kusei K」とある。この年10月劉生は満州に行き、11月末に帰国後、滞在していた山口県の徳山（現周南市）で12月20日に急逝した。この時期の静物画は以前に較べると輪郭を崩したような感じのものが多く、いわゆ

る「デロリの美」に当てはまるものだろうか。画面の右で断ち切れたようになって

が、もう一点正月に描いた作品「卓上花果（薔薇図）」があり、こちらは左が切れている。卓は同じものである。正月三日にはらの花をギヤマンのびんに挿し、橙冬瓜茄子を添えて六号に油絵の描き初めをした」と岸田麗子「父岸田劉生」にあるのがこちらの作品である。本作品とはサイズが同じで縦位置と横位置の違いがあり、描かれている静物物はほぼ同じだが、配置を変えながら描いたものと思われる。

【学芸員 妹尾克己】

表紙の作品